

高校生とともに学び、つくりだす地域

## 高校生が自治会を運営する

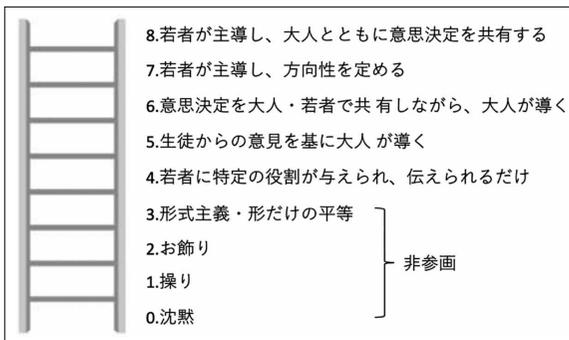
### ■今号のねらい

今号は、高校生が役員となって自治会や町内会を運営するとはどういうことかを事例を通して考えてみたい。ここまでの3つの号では、「地域社会に関わる高校生が増えていること、そして地域の大人はともて学びあう姿勢で接していくことの大切さ、さらに地域活動に参加する高校生の動機を示した。動機については、高校生は地域の課題というより、仲間と一緒に楽しめるか、知り合いがいるかといった点が重要となることを示した。そして前号では高校生の居場所についてサードプレイス理論の「常連の存在“や”卒業後もつながりを持ち、いつでも帰ってこられる場所とな

ること」の重要性を白河市の事例をもとに論じた。今回は、いわゆる「参画のはしご論」の中でも最も上段にあたる自治、つまり高校生が意思決定の中心的な役割を担うとはどういうことかについて学びたい。

### ■再考：参画のはしご

中学生、高校生が地域づくりに参加するとはどういうことなのか。地域づくり実務者の皆さんと最初に復習しておきたいのが、子どもの地域参画に関する理論として有名な、ロジャー・ハート(Roger A. Hart) (以下、ハート)の「参画のはしご」である。ハート(1997、木下他訳2000)は、子どもの参画を、「人の人生



参画のはしご(ハート、1997、木下他訳、2000、p42をもとに筆者再作成)

や人が暮らすコミュニティの生活に影響を与える意思決定を共有するプロセス“だと



石井 大一郎

(国立大学法人宇都宮大学  
地域デザイン科学部 教授)

定義した。参画の形態は8つに分けて提示した。ハートは、はしごの上段にいくほど子どもが主体的に関わる程度が大きいことを示している。他方、上段ほど重要だということではなく、子どもたちが、自分たちの選んだどのレベルでも活動できるように状況を作り出せるように社会や大人が支えることが必要だと述べている。また、「非参画」の段階を避けることを指摘している。

### ■子どもが成長し、 地域社会が民主主義の舞台となる。

では、子どもの参画とは何に参画するのであろうか。ハートは、子ども自身の人生への参画、つまり、子どもが自分の生活を主導することが第一としている。また、コミュニティ参画という用語も用い、地域コミュニティへ子どもが参画することの重要性を述べている。これにより子どもの成長と同時に、真に民主的な意思決定や組織が育まれるとしている。まさに地域社会が民主主義を学ぶ場になることが志向されている。このように整理してみると、私たち日本の地域社会、とりわけ自治会をはじめとした地域自治組織ではこうした機会を設けているだろうか。

### ■高校生が自治会・町内会の役員を担う 全国の事例

コロナ禍を経て、近年、中学生や高校生が自治会の役員になる例をみるようになった。例えば、愛知県稲沢市朝府町のUR賃貸住宅団地の国分団地自治会では高校生2人が役員を務め、子ども向けの寺子屋事業を復活したり、お年寄りも参加できる緑日をひらく。千葉県松戸市小金下町では、町会役員として広報部員を務める高校生がいる。「誰でも気軽に参加できる町会」を目指し、大人も子どもも楽しめる行事を考案したり、ポスターを作製したりと町会活動に奮闘する。さらに、鹿児島市唐湊山の手町内会では、中学時代に不登校を経験し、通信制高校に通う17歳から町内会長を担う例もある。また、横浜市磯子区の分譲集合住宅団地地区のBrillia City横浜磯子自治会では、24人の役員のうち、立候補した中学生、高校生、大学生の計6人が役員を担っている。

### ■中学生が役員に立候補するまち

#### ～ Brillia City横浜磯子自治会～

ハートの参加のはしごを上段の4つの段



役員を担う中学生・大学生



出番や役割を体験する祭り

階、またそれらを組織的に実現できているBrillia City横浜磯子自治会以下、ブリリア（を）紹介する。自治会長の田形勇輔さんへの聞き取り調査をもとに整理したものを



地域で輝くりりちゃん

現在役員2期目を務める高校生のりりちゃんは、小学生の時に、自治会のお祭りでスーパーボールすくいの出店を担ったのが想像以上に楽しく、周りの大人も楽しそう、そして小さな子どもたちからは「ありがとう!」と言ってもらえる。こう

■子ども性やその人らしさを起点にした自治

である。ブリリアは、約1200世帯のマンション住人で構成される自治会である。2022年、まだ13歳の中学生だった少女りりちゃんが役員に立候補したのが始まりである。現在(2025年1月)、中学生3人、高校生1人、大学生2人が役員を担い、自治会の重要な意思決定を担っている。



田形自治会長(右)と中高生(左)

した経験がその後、「私も運営側として参加してみたい」となったようだと言う。この他のメンバーもお祭りで自ら活躍した経験が役員立候補の動機づけとなっている人が少なくない。また、親が防災活動に取り組む際に一緒に連れられて参加していくうちに関心を持ち自ら役員になった人もいる。最初は与えられる役割であったかもしれないが、それを支える大人が、その人だからこそ活かせる機会や役割を本人とともに生み出している。りりちゃんは、スーパーボールすくいのボランティアから、得意な絵を生かしたチラシ作り、そして今では祭りやイベントの司会、若者が主体となった事業の企画や運営をしている。参画のはしごそのものを大人の役員らと共に作り出してきた。

■参画のはしご論を疑う

ハートの「参画のはしご論」は、参画する子どもを組織化し、代表性を確保するかたちで「民主主義の実現」を目指すことが志向されている(図2の左上)。これ自体は大事なことであるが私たちは注意する必要がある。結果的に、大人の管理下にあることになってしまっているのではないだろうか。それは、子どもの権利の発現にそぐわない。大人にとって自明の社会やまちの課題を子どもたちに意識化させ、ともに課題解決に向かうとする道筋を無自覚に用意してしまうことである。ブリリアでは、ハートが志向す

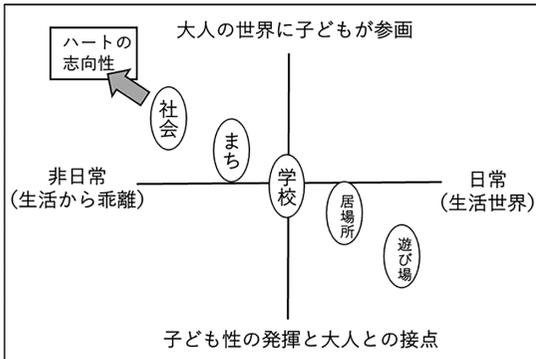


図2: 日本における子ども参画・参加実戦の整理図 山下(2009)をもとに筆者再作成

るはしこの上段への参画だけでなく、子どもが日常の中に身を置き発意し、そのやってみてみたいことを実現する子ども性が存分に生かされた空間や場が作られていることである。2025年2月には、中高生役員による地域イベントが企画されている。

### ■子どもも大人も主体形成

田形会長は、「自治会員や役員が」なにかをしなければならぬという仕組みがあると、それだけで負担に感じてしまう。そうではなく『楽しい』『やりがいを感じる』『好き』といった感情を報酬に『やってみよう』『やりたい』と思ってもらえる活動にできるかどうかが自治会運営で大事だ」と語る。筆者は、石井ほか(2018)において、やってみよう、やりたいという新しい世界

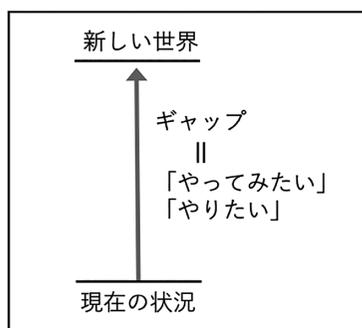


図3: 主体形成

を描き、現状とのギャップを認識し実行することをその人らしさ(主体)が育まれる(形成)と捉え、主体形成と呼んでいる。また、田形会長は、自治会には防災や防犯といった役割があるが、これらは楽しんだ先に得られればいいと捉えている。子ども性やその人らしさが発揮されることが大切にされる参画のモットーがある。現在は、中高生役員が中心となった企画が進行中である。田形会長は、自分の次の会長は今の中高生・大学生役員の中から生まれるかもしれないという。大人の世界への子ども参画ではなく、子どもの世界に大人が参画する「これまでにない新しい自治が生まれよう」としている。

### ■となりのトトロの世界

田形会長は、まちの子どもたちには、他の大人たちには見えていない不思議な親しみやすさや輝きをまとった中高生の姿が見えている。まるで「トトロ」のようだ(笑)という。となりのトトロには「忘れものを、届けにきました」というコピーがある。身近な日常の中で失ってしまったものを探すが主題になっている。現代の地域自治に忘れられた『やってみよう』『や

りたい』をその人視点で描いたり、世帯加入Ⅱ大人だけでなく誰もが意見し、聴き合う世界を取り戻すことを、中高生が教えてくれているということではないか。

りりちゃん(トトロ)は、子どもたちの求心力がすごく、お祭りで司会をすれば、子どもたちはりりちゃんの周りに集う。大人にはできないコミュニケーションをし、地域に新しい関係性を生み出している。また、中高生の積極性に影響を受けてであろうか、近年は大人の役員への立候補の数も増えている。大人が自らの中にあるトトロの世界を見つけ出しているのかもしれない。(了)

### 参考文献:

- 木下勇・田中治彦・南博文(監修) IPA 日本支部(訳)(2000)、子どもの参画—コミュニティ作りと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際、萌文社
- 山下智也(2009)、子ども参加論の課題と展望…ロジャー・ハートの「子ども参画」論を乗り越える、九州大学心理学研究、vol.10、pp.101-111、2009

○石井大朗ほか(2018)、はじめの地域づくり実践講座、北樹出版、2018